明治維新150年（平成30年）

福井が舞台の「大河ドラマ」を

幕末明治期の偉人

由利公正

福井県・福井県大河ドラマ誘致推進協議会

明治維新150年（平成30年）の大河ドラマに近代日本の幕開けに活躍した福井ゆかりの人物を

1 現代に通じる由利公正

◆由利は、福井藩と国の両方で活躍した人物であり、地方出自の人材の活躍により国が発展することは、今日の地方創生の目指す姿に通じるものである。

◆由利が責任者となった明治維新直後の財政政策の柱の一つは各地の殖産であり、地方を豊かにすることで国を豊かにすることが構想されていた。由利の構想は今日の我が国の目指すべき方向と一致する。

由利 公正（三岡八郎）
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

2 明治維新における由利公正の功績

明治維新の立役者は西郷隆盛や木戸孝允達ということになっている。しかし、明治維新を支えた一番の功労者は由利公正ではないだろうか。

由利は、「五箇条の御誓文」の草案の起草者である。御誓文は、明治維新の指導精神として、近代国家建設のさまざまな施策に受け継がれた。また、太政官札を発行し、新政府の運営費を賄った。

❶「五箇条の御誓文」の起草

坂本龍馬が新政府の方針として創った「船中八策」をさらに吟味し、「議事之体大意」を著した。「議事之体大意」は、明治元年3月14日に、新政府が公布した国家の基本方針「五箇条の御誓文」の原型となった。

❷太政官札の発行

わが国最初の全国通用紙幣である太政官札の発行を建議し、慶応4年（明治元年）5月から明治2年7月まで発行する。これにより、明治政府の殖産興業諸改革の莫大な費用は賄われ、国家経済は成長路線に乗り、廃藩置県や地租改正も可能になった。

❸殖産興業政策の推進

東京府知事の時代、明治５年５月から翌６年２月まで、欧米視察に参加した際、絹布見本数種を持ち帰り、機業に関わっていた旧福井藩士に渡し、従来の越前奉書紬の品質改良を促した。これが、福井において繊維産業が隆盛を誇るきっかけとなった。

❹東京不燃化計画の策定・実行

東京府知事に任命された後に発生した明治５年２月の大火で約５千戸、２８万余坪を焼失。これを受け、抜本的な都市改造が必要と考え、銀座の街路の拡幅や不燃性の煉瓦建築など大規模な不燃性都市化計画を提案、実現させた。

❺民撰議院設立の建白

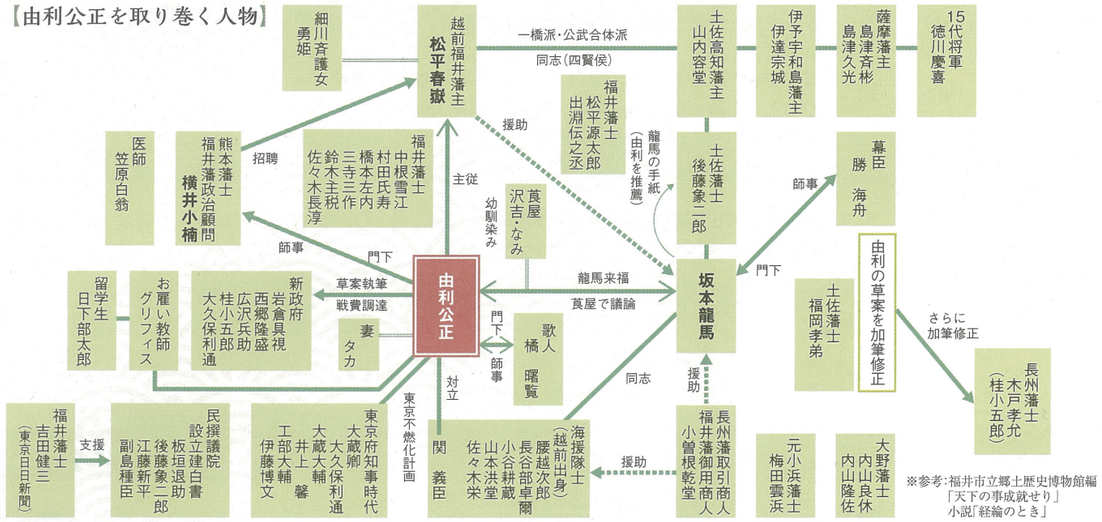
明治７年１月、板垣退助、副島種臣、江藤新平らとともに、民撰議院の設立建白を行った。

由利公正の略歴

生没：文政12年（1829）～明治42年（1909）幕末の福井藩士。明治維新まで三岡八郎を名乗る。

・文政12年（1829）福井城下毛矢に生まれる。
・福井に来遊した横井小楠の学問に影響を受け、藩財政を研究。殖産興業策を進め、藩財政を黒字化した。
・慶応3年(1867)、坂本龍馬が新政府への参画を求めて来訪。
・維新後は新政府の参与となり財政を担当。また、「五箇条の御誓文」の草案を起草。
・明治4年(1871)には廃藩置県後の初代東京府知事となり、翌年、岩倉欧米視察団に随行。
・その後元老院議官、貴族院議員を務める。
・81歳で没。

【由利公正を取り巻く人物】



※参考：福井市立郷土歴史博物館編「天下の事成就せり」小説「経綸のとき」

【幕末期、明治維新期における偉人の由利公正評】

	由利公正に対する評価
坂本龍馬	・後藤象二郎に宛てた手紙より **「総じて金銀物産等のことを論じるには、この三岡八郎を置いて他に人はいないでしょう。」**
西郷隆盛	・由利が太政官札を発行したが、その評価について **「由利公正の金札（太政官札）がなければ、維新はあと数年かかっていただろう。」**
木戸孝允	・由利が会計官を辞職後も中央政界復帰を求める手紙を送る。 **「（木戸から）戻って来いと手紙が来ているし、先日も国の政体について意見を述べるよう通知があった。」**（由利談）
勝海舟	・勝の命により福井藩に赴いた龍馬が、後に由利を新政府へ推薦する。 **「三岡がよろしいと言えば春嶽公も何も言わないだろう。何しろ、自力で藩庫を潤した勘定役だからな。」**
グリフィス	・グリフィスは由利とお互いに居宅を訪問し合う仲であった。 **「東京から速達で手紙を受け取る。三岡からで、私に早く江戸に来いという通知だった。」**

由利公正（三岡八郎）をめぐる エピソード集

1 由利公正の人物像

1 乗馬の名手

陣傘陣羽織に着飾った青年藩士が、馬にまたがり城下を疾走する中、町民や農民の若者が、鐘や太鼓をならして馬を威し、行く手を阻み、勇猛果敢な攻防戦を繰り広げる福井藩名物の「馬威し（うまおど）」に19歳で見事優勝。松平春嶽の目に留まる。（小説「炎の如く」、「経綸のとき」による）

馬威しの様子。独特の衣裳と装具で馬の前に立ちはだかる「名物男」（中央）
大勢の見物客が見入っている

2 文武両道

剣道は真影流、槍は無辺流、西洋流の新式砲術それぞれ免許皆伝の腕前。馬威しの勝利をねたんだ上級武士の師弟数名から切りかけられた際も、竹竿をやりに見立て撃退する。

日頃の武術の鍛錬の結果、剛健な体力を身に付ける。ペリー艦隊の２度目の来航の際、福井藩が先遣隊を江戸に出した際、昼夜兼行わずか３日間で全道程を踏破する。

また、幕末を代表する歌人橘曙覧の門下生として、短歌も学んだ。（小説「炎の如く」、「経綸のとき」による）

3 信念や信条をあくまで貫く頑固者

明治元年、古くからの金貨通用の地である江戸（東京）では太政官札発行は無理だとして、反対していた江藤新平に対し、由利は、議論を拒否したら負けというルールを設け、立会人を置き、朝から夕刻まで、連日７日間江藤と議論を戦わせた。８日目に江藤は会場に姿を現さず、由利の勝ちとなった。

4 愛妻と幼馴染み

８歳年下の「タカ」は由利が49年連れ添う愛妻。また、坂本龍馬との会談場所となった莨屋（たばこや）旅館の娘「なみ」とは幼馴染みとして生涯の付き合いとなった。（小説「経綸のとき」による）

再現された三岡へっつい

5 新型「へっつい（かまど）」の考案者

幽閉蟄居を命ぜられている４年４か月の間に、かつて韮山反射炉で学んだ技術を応用し、炎の熱を逃さず、土の中に埋めることで保温力を増す新型「へっつい」を考案。従来の「へっつい」よりはるかに燃料が節約でき、しかも火力が強い。考案された「へっつい」は、昭和10年ごろまで「三岡へっつい」とよばれて福井県下で用いられていた。

（小説「炎の如く」、「経綸のとき」による）

2 各地の由利公正エピソード

毛矢侍（けやざむらい）と「幸橋」　福　井

福井城下の毛矢町は、旧松岡藩から移住した武士の居住地であり、三岡家をはじめとする居住者は「毛矢侍」と称された。

毛矢町から足羽川への架橋が望まれたが、防衛上の観点から認められず、毛矢侍が城へ出仕する際には、両岸に渡した綱を手繰って往来する「繰り舟」を用いていた。

由利が藩の要職に抜擢された文久２年（1862年）にようやく悲願であった架橋が実現。毛矢侍はその喜びから「幸橋」と命名した。

幸橋南詰上流側に整備された由利公正広場

肝胆相照（かんたんあいて）らす仲　坂本龍馬　高　知

坂本龍馬肖像（高知県立歴史民俗資料館蔵）

坂本龍馬から後藤象二郎に宛てた手紙には新政府の財政担当者に由利を推す旨の記載がある。

由利と坂本龍馬とは大変気が合う仲で、龍馬二度目の福井来訪時、足羽川近くの山町の莨屋（たばこや）旅館で、早朝から深夜まで延々日本の将来を語り合った。当時、謹慎中の由利には立会人として藩士が付き添ったにもかかわらず、龍馬は遠慮せずに「三岡、話すことが山ほどあるぜよ」と叫んだと伝えられる。

「五箇条の御誓文」の原文となった「議事之体大意」は龍馬の「船中八策」と思想的な基本が共通している。

龍馬が福井を離れてから10日後、家老の家に招かれた由利は、帰り道、懐中に忍ばせていた龍馬の写真がなくなっていることに気付く。胸騒ぎがしたその2日後、龍馬の死を知ることとなる。

横井小楠との運命的な出会い　熊　本

横井小楠肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

横井小楠の教えに従って、福井藩でも産業奨励を行うことになり、その責任者に由利が選ばれる。万延元年（1860）、横井小楠は福井藩の藩是として『国是三論』を起草したが、そのうちの「富国論」を実践したのが由利の財政再建策である。当時の由利は「あいつは銭勘定ばかり堪能で、武士にあるまじき振る舞いをしている」と周囲から馬鹿にされてきたが、小楠との出会いより、これまでの由利に対する批判が一変する。

小楠が、福井へ赴いた年、弟死亡の知らせで一時熊本に帰国することとなったが、その際由利も同行し、毎夜、小楠と酒を酌み交わし議論を行った。この３年後、由利は再度熊本に小楠を訪ねている。

長崎、横浜に福井のアンテナショップ　長崎・横浜

由利は長崎に四度出張している。安政5年、物産を興し通商貿易を行って収入を図るよう中根雪江や橋本左内に働きかけ、貿易資本の確保と貿易状況の視察を建議し採用される。

その後長崎に出張し、唐物商の小曽根乾堂の協力を得て、浪ノ平に越前蔵屋敷を設けた。その後、長崎江戸町に福井屋が開設され、そこを拠点に生糸等の輸出が行われる。同じように横浜にも出店が設けられ、販路開拓が図られた。

紙幣発行のため、京都、大坂で資金集め　京都・大阪

明治新政府は徳川慶喜追討のため、御用金（会計基立金）を集める必要に迫られ、由利がその責任者となる。明治元年、由利は京都の大商人に5万両、大坂の大商人に同じく5万両の調達を命じる。計10万両の御親征費が調達される。

その後、紙幣の発行により産業振興を図ろうとした由利は、まず大坂でその準備に入る。同年5月には紙幣発行の日が決まったものの、反対論が根強かったため、由利は、「私は覚悟した。（発行されなければ）二条城に保管してある金札に火を付け、自刃する。」と訴え、予定通りの発行にこぎつけた。

銀座を煉瓦造りに～東京不燃化計画～　東　京

明治5年2月26日、和田倉門内兵部省から出火し、銀座、京橋さらに三十間堀から築地まで燃え広がり、5千戸、28万余坪を焼き尽くす大火となった。由利の公舎も類焼した。この火事をきっかけに、由利は東京不燃化計画を作成し、実現を図った。

由利は、当時のニューヨークやロンドンなど、国際都市の目抜き通り並みに銀座大通りの幅員を45.5メートルにすべきだと主張したが、大蔵省側の反対にあい、27.3メートルの拡幅となった。

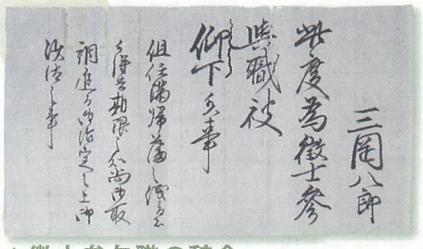
煉瓦銀座之碑（銀座一丁目交番前）

碑文（拡大）

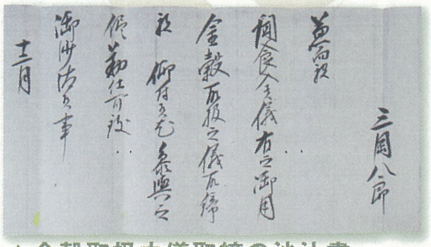
由利公正の生涯

和暦	西暦	年齢	主な出来事
文政12年	1829	1	11月11日、福井城下（福井市）で、福井藩士三岡義知と幾久の長男として生まれる（通称は石五郎、八郎）。
嘉永 4年	1851	23	福井に来た横井小楠の講義を聞き、学問を志す。
嘉永 6年	1853	25	父が亡くなり、家督を継ぐ（知行100石）。 江戸で大砲と鉄砲の修行をする。
安政 4年	1857	29	藩の大砲・鉄砲・弾薬製造の責任者となる。
安政 5年	1858	30	横井小楠の一時帰国に従って、中国・九州地方を視察する。 このころ、藩の制産方（産業・流通の担当）の責任者となる。
万延元年	1860	32	このころ、長崎に藩営の店を設け、オランダなどに生糸を輸出する。
文久元年	1861	33	産物会所が開かれ、藩の殖産興業に努める。 福井城下の足羽川に幸橋を架ける。
文久 2年	1862	34	財政の責任者である奉行となり、藩の政治をリードする。
文久 3年	1863	35	自宅で横井小楠、坂本龍馬と国の将来を語り合う。 藩内の対立により、自宅謹慎となる（～1867年）。
慶応 3年	1867	39	坂本龍馬と城下の茑屋（たばこや）旅館で新政について話し合う。 新政府の徴士参与となり、財政を担当する。
明治元年	1868	40	「議事之体大意」を執筆する（「五箇条の御誓文」の原案）。 日本初の全国通用紙幣 太政官札を発行する。
明治 2年	1869	41	参与を辞職し、福井藩知事松平茂昭の補佐となる。
明治 3年	1870	42	先祖の姓に戻し、由利公正と名乗る。
明治 4年	1871	43	福井藩庁大参事心得、その後、第4代（廃藩置県後、初代）東京府知事となる。
明治 5年	1872	44	東京銀座を復興し、レンガ街にする方針を打ち出す。 岩倉使節団に加わり、欧米の国々を視察する。
明治 7年	1874	46	板垣退助らと民撰議院設立の建白書（国会開設の要望書）を提出する。
明治20年	1887	59	華族に加えられ、子爵となる。
明治23年	1890	62	貴族院議員となる。
明治27年	1894	66	有隣生命保険株式会社を設立し社長となる。
明治42年	1909	81	4月28日、東京で亡くなる。

由利公正関係資料

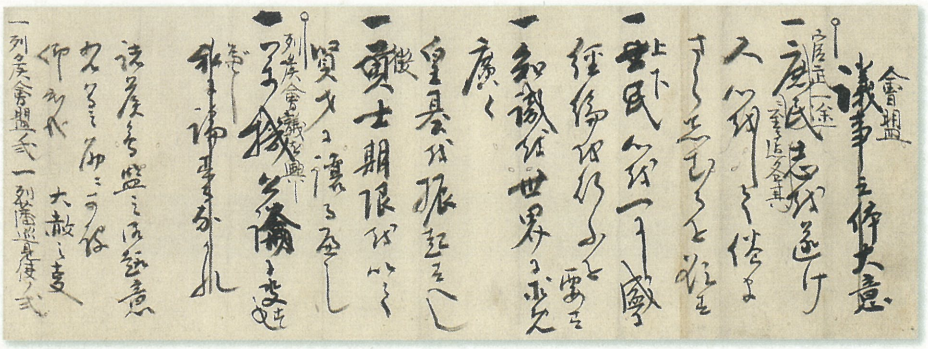


▲徵士参与職の辞令
（福井県立歴史博物館蔵）
新政府の参与として出仕するよう命じたもの
（慶応3年 1867年）



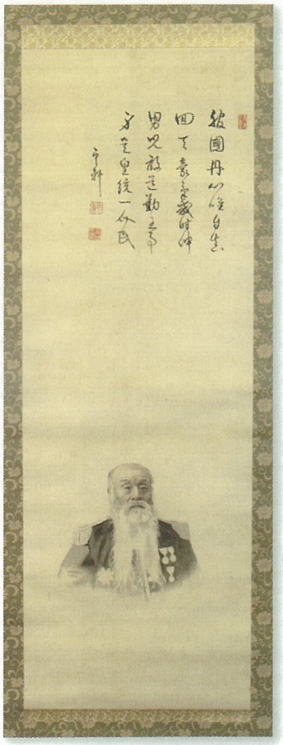
▲金穀取扱之儀取締の沙汰書
（福井県立歴史博物館蔵）
新政府が三岡八郎を財政担当の職に任命したもの
（慶応3年 1867年）

▲由利家伝来のシルクハット
（福井県立歴史博物館蔵）

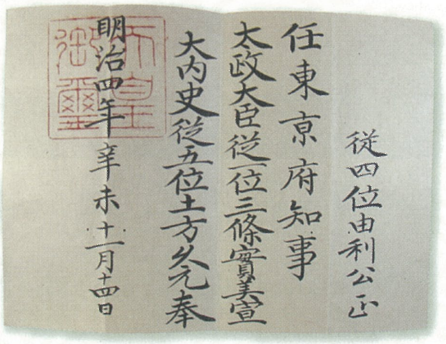


▲議事之体大意（福井県立図書館蔵）
由利公正が執筆したもので、明治政府の国家方針「五箇条の御誓文」の原案となった（明治元年 1868年）

▲太政官札
（福井県立こども歴史文化館蔵）
明治元年（1868年）、由利公正の発案により
発行された全国通用紙幣



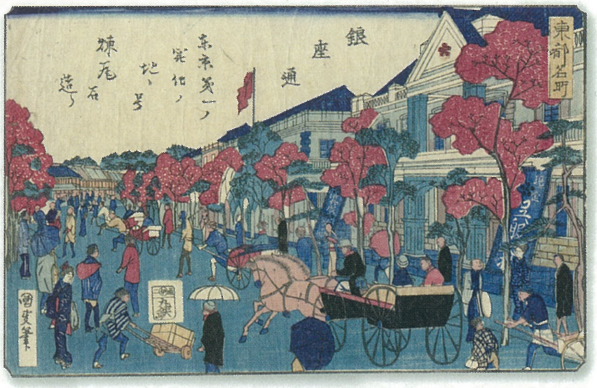
▲由利公正画像書幅
（福井県立歴史博物館蔵）



東京府知事辞令▶
（福井県立歴史博物館蔵）
明治４年（1871年）、
東京府知事に任命された

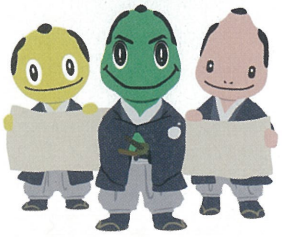
◀東京府知事時代の
由利公正
明治4年（1871年）～
明治5年（1872年）
（三岡丈夫著「由利公正伝」より）

東京名所　銀座通▶
（福井県立歴史博物館蔵）
銀座通りを復興し、煉瓦
造りの街にする方針を打
ち出した
（明治5年　1872年）



福井県大河ドラマ誘致推進協議会
福井県観光営業部ブランド営業課
910-8580　福井県福井市大手3丁目17-1
TEL：0776-20-0762　FAX：0776-20-0513
E-Mail：brand@pref.fukui.lg.jp

健康長寿の福井



©FUKUI/play set products